

## 限定継続態の語用論的用法

～Мы порешаем этот вопрос.を例に～

金子百合子

### はじめに

言語にはそれを操る人々の思考様式が反映されるという言語相対論のテーゼが認知心理学や認知言語学の文脈で新たな展開を見せ、人間の言語外現実の認知のし方には普遍的なものと言語相対的な側面があることが知られるようになって久しい。<sup>1</sup> 動詞で表される動的世界の表現も言語によって優勢的な視座が異なり、そのことを池上は「スル」言語と「ナル」言語と呼び対立させた。<sup>2</sup> 時間軸上における動作の捉え方を表すアスペクトというカテゴリーについても、まさに限界的な動作の捉え方が優勢なロシア語と安定的な動作の捉え方を好む日本語と言語相対的な差異が出る。<sup>3</sup> 最も自然で話者によって無意識に表現される文法意味は、当該言語の優勢的な表現形式の中心にある。語彙意味は話者の意識的な選択であり話者の言わんとする意図が明確に現れる。語形成意味はその中間と考えられ、デフォルトの表現ではもの足りないところに新たに意味を付け足して、話者の言いたいところを補足して伝える。例えば、日本語の「彼は手紙を書いた」は、ロシア語では *он написал / писал / начал писать письмо* と文脈によって動作の位相別に書き分ける必要がある。外国語としてのロシア語教育の中では体の区別という重要な文法事項を教えるために、体ペアの完了体項の方（上記の例では *написать*）を「書き終わった」「全部書いた」「最後まで書いた」などと語形成手段も含め語彙の力を借りて訳し分けようとするところがある。その時点で、ロシア語の体が文法カテゴリーであり *писать-написать* がひとつの語彙素であるという重

<sup>1</sup> George P. Lakoff, *Women, Fire, and Dangerous Things. What categories reveal about the mind* (Chicago: University of Chicago press, 1987), pp. 304-309; Ronald W. Langacker, *Concept, Image, and Symbol. The cognitive basis of grammar* (Berlin: Mouton, 1990).

<sup>2</sup> 池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店, 1981年。

<sup>3</sup> ロシア語に関するものとして、例えば、*Петрухина Е. В. Доминантные черты русской языковой картины мира (в сравнении с чешской) // Русское слово в мировой культуре. Пленарные заседания: сборник докладов. X Конгресс МАПРЯЛ. СПб., Т. 1. 2003. С. 426-432*; ロシア語と日本語の対照研究としては、例えば、金子百合子「ロシア語アスペクト体系における意味的優勢素と開始表現—日本語に映し出される姿」『ロシア語ロシア文学研究』37号, 2005年, 25-33頁。

要な観点が背後に退くというジレンマに陥る。日本語では動作が終了した理由を明示化する表現の文法的な義務性はない。

だが、そのような日本語の世界に生きていても、動作が最終的な限界に到達して終了したことを特に表したいと思うことがある。そのときに「読みきった」や「やりきった」などと語形成手段に訴える。さらには、「勝つ」のような、本来、過程を持たず、到達した結果そのものを名づける動詞にさえ「勝ちきった」と結果到達を強調することができる。このように動作の限界に到達したことを意識して語彙化する日本語話者の心理は、限界性の表現を苦手とする日本語の特性の裏返しである。<sup>4</sup> では、ロシア語にはそのような優勢的視座の「裏返し」現象はあるだろうか。すなわち、限界に到達しないことを特に表したい、という気持ちの現れである。その候補として考えられるのが、接頭辞 *no-* が付加される限定継続態 (delimitative, ограничительный способ действия) である。この非常に生産性が高い限定継続態が、いわゆる“規範的な”体ペアを形成する完了体動詞に代わって登場するとき、様々な文体的、語用論的效果を持つことがある。拙稿では限定継続態についての先行文献の言説を辿りながら、限定継続態と“規範的”完了体動詞との相補関係の生じる理由、そして興味深い限定継続態 *порешать* が登場する文脈とその背景を明らかにする。

## 1. アスペクトと動作様態

スラヴ諸語一般——本稿ではロシア語に限定して話を進める——における動詞アスペクトのカテゴリーを論じる時、そこには意味的にも形式的にも密接な相関にありながら、概念的および機能的には明確に線引きされてきた、動詞の二つの存在様式がある。ひとつは、語形成手段が持ち込む語形成（語彙）意味の差異が捨象されアスペクトの文法意味のみで異なる、特定の完了体動詞と不完了体動詞の組合せの、いわゆる“規範的体ペア”の存在である。もう一方は、形態的には体ペアと共通する派生手段を持ちながら、派生基語の文法アスペクトを変化させると同時に、派生基語幹が意味する動的事象が接辞が持ち込む新たな語形成（語彙）意味によって変形する、動作様態の存在である。一言で言えば、前者ではアスペクトの文法意味「だけ」が問題となっており、後者では文法意味に加えて、アスペクチュアルな「語彙文法意味」が問題になっている。動詞アスペクト研究史において、当初混在して理解されていた両者は「体ペアの相関性を持つ動詞」と「体ペアの相関性を持たない動詞」という区別を

---

<sup>4</sup> 金子百合子「ロシア語と日本語における“強い”限界と“弱い”限界の表し方」『ロシア語ロシア文学研究』50号、2018年、59-84頁。

上位概念として、文法的なパラダイムとしての完了体：不完了体の対立と、語彙文法カテゴリーとしての動作様態とが明確に区別されてきた。その中で、本稿で取り上げる限定継続態は、接頭辞 *no-*の付加によって語形成意味が派生基動詞の意味に加わる動作様態のひとつとして、体ペアを持たない「非相関的な完了体動詞 несоотносительные глаголы сов. вида」と位置づけられてきた。<sup>5</sup>

しかし、議論の当初から語形成意味がゼロである接頭辞、つまり純粹に完了体化するだけの接頭辞の存在については様々に異なる主張があり、接尾辞派生型のみを認める立場や、接頭辞派生型をも認める立場があり、さらに後者では何をそれと認めるかでも意見は異なり研究者の意見は一致を見ていない。<sup>6</sup> さらに昨今では対に限定された「(体) ペア」の概念そのものを否定し、動作様態全体の意味概念ネットワークの中で派生基(単純)動詞と派生動詞の関係性を位置づけようとするものもある。<sup>7</sup> 動作様態と文法的体ペアの境界が揺らぐという事態の中でキープレーヤーとして振る舞うのが限定継続態である。これについては3節で触れる。

## 2. 限定継続態とは

80年のアカデミーロシア語文法で限定継続態は「動作を時間の諸限界で、ある一定時間のひと区切りで境界づけること ограничение действия временными пределами, определенным временным отрезком.」と定義される。<sup>8</sup> パドゥチェヴァの例を挙げれば、限定継続態の *побеседовал* が意味する事態は、‘話し始めて、ある時間にわたって話しをして、話しを止める начал беседовать, беседовал некоторое время и кончил’ ということである。<sup>9</sup> この解釈には、時が流れる順序に従って、動作の開始—持続—終了という3つの位相が関係する。動作の生起がそれと名づけられるには動作の開始は

<sup>5</sup> Виноградов В. В. Русский язык. Грамматическое учение о слове. М., 1947. С. 532; Земская Е. А. Типы одновидовых приставочных глаголов в современном русском языке // Поспелов Н. С., Шведова Н. Ю. (ред.) Исследования по грамматике русского литературного языка. М., 1955. С. 5-41; Шведова Н. Ю. (ред.) Русская грамматика. Т. 1. М., 1980. С. 598. (以降、РГ-80)

<sup>6</sup> Черткова М. Ю., Плунгян В. А., Рябчиков А. А., Кузнецов Д. О. Ответы на анкету аспектологического семинара филологического факультета МГУ им. М. В. Ломоносова // Вопросы языкознания. 1997. № 3. С. 133-135.

<sup>7</sup> Laura A. Janda et al., *Why Russian Aspectual Prefixes Aren't Empty* (Bloomington: Slavica, 2013).

<sup>8</sup> РГ-80. С. 597-598.

<sup>9</sup> Падучева Е. В. Семантические исследования (Семантика времени и вида в русском языке; Семантика нарратива). М., 1996. С. 145. 尚、同様の解釈は他にも以下の文献で見られる。Авилова Н. С. Вид глагола и семантика глагольного слова. М., 1976. С. 283; Шатуновский И. Б. Проблемы русского вида. М., 2009. С. 67.

自明の前提であるので、限定継続態の意味にとってより本質的なのは残りの2つの位相——「持続する過程・状態」という安定的位相と「動作の終了」という限界点である。

## 2-1. 限定継続態の派生基語

限定継続態の派生基語となる動詞は、それが表す動作の性質が均質的で内的限界性を備えていない非限界動詞であることを共通点とする。<sup>10</sup> したがってこれらの動作はそれを終了させる何らかの契機が外的になければ、理論上、永遠に続く。換言すれば、内的限界が見込まれていない動作だからこそ、時間的な区切りすなわち動作の終了限界を任意に持ち込むことが出来る。限定継続態に含意される終了限界は「絶対的に外的で、時間的なもので、動作そのものの性格とは無関係であり事前に決まっているものではない」。<sup>11</sup> そのような性質を本来持つ、あるいは用法によって許容する動詞の語彙意味クラスはさまざまであるが、代表的なものには、不定方向の運動や移動を表わす動詞 (*походить, побегать; погулять, побродить*)、活動の動詞 (*почитать, пошить, поесть, поискать*)、心理的状态の動詞 (*повеселиться, потерпеть, пошучать*)、発話の動詞 (*пошуметь, поговорить, побеседовать*)、存在の動詞 (*побыть, погостить*)、空間位置の動詞 (*постоять, посидеть, полежать*) などがある。

逆に、限定継続態を形成しない限界動詞は、内的限界がその動作の終了限界として確定しており、通常、内的限界へ方向付けられた過程を表わす不完了体動詞と内的限界への到達を表わす完了体動詞からなる規範的な体のペアとして存在し、その全体が不可分の「行為」<sup>12</sup> と理解されるものである。したがって、原則、体ペアを形成する動詞は限定継続態を作らないが (*\*пооткрывал окно, \*пописал статью*)<sup>13</sup>、その不完了体項が派生基動詞となって限定継続態を形成するとしたら、それは先述したように

<sup>10</sup> *Земская*. Типы одновидовых приставочных глаголов. С. 26; ПГ-80. С. 598; Michael S. Flier, “The Scope of Prefixal Delimitation in Russian,” in Michael S. Flier & Alan Timberlake, eds., *The Scope of Slavic Aspect* (Columbus: Slavic Publishers, 1985), pp. 43-46; *Mehlig H. R.* Гомогенность и гетерогенность в пространстве и времени // *Revue des Études Slaves*. 1994. LXVI/3. С. 593; *Падучева*. Семантические исследования. С. 145; *Зализняк А. А., Шмелев А. Д.* Введение в русскую аспектологию. М., 2000. С. 111; Stephen M. Dickey, “Aspectual Pairs, Goal Orientation and PO-Delimitatives in Russian,” *Glossos*. Issues 7, Spring 2006, p. 15.

<sup>11</sup> *Шатуновский*. Проблемы русского вида. С. 67.

<sup>12</sup> フォン・ウリクトの変化論理学では、行為 act は意図的な活動が内有的で論理的な結果を伴う時に成立する。Georg H. von Wright, *Norm and Action: A logical Enquiry* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963), pp. 35-41. パドゥチェヴァもまた行為 действие を「目的のある活動+結果」と解釈している。*Падучева*. Семантические исследования. С. 103.

<sup>13</sup> *Падучева*. Семантические исследования. С. 145.

非限界的な過程として解釈されているということになり, *написал статью* も許容されることになる。<sup>14</sup> 他に, 限定継続態が動作の終了限界を意味的構成素として持つ以上, 終了させることが考えられないようなもの, 例えば, 恒常的な特性, 超時間的な真理, 時間を抽象した態度や生業を表す動詞からは形成されない。<sup>15</sup>

## 2-2. 限定継続態における動作主の意図性

限定継続態は本来限界が見込まれていない動作を時間的に区切る, すなわち動作に終了限界を持ち込むものであるので, その契機が必要となる。それと関連して, 限定継続態が表わす動作には動作主による意図性や制御可能性といった特徴が備わることが指摘されている。<sup>16</sup> 以下はシャトゥノフスキーの例である。<sup>17</sup>

(1) а. *Он постоял немного.*

б. *?Стол постоял в углу.*

同一の限定継続態 *стоять* を用いた有情物主語の文(1a)が自然であるのに対し, 無情物主語の文 (1b)はそれだけでは不自然あるいは不十分で, さらに過程の終了を明示的に表わす文脈が必要となる (*Зуб поболел и перестал.*<sup>18</sup>; *\*Солнце осветило. vs. Солнце осветило и зашло за тучу.*<sup>19</sup>)。動作の開始と終了を含意する限定継続態の自立性は, 有情物主体が自らの意図するところに従って当該の動作を開始し終了させる能力を持つ活動主体であることで保証されるが, 無情物主体の場合, 動作の開始と終了は「ボールに包まれた使役者に依存し皆目見当がつかない」<sup>20</sup>, 故に終了限界をもたらす契機が明示的に必要とされるのである。

ここまでの議論はふたつの点に帰する。第一の点として, 限定継続態が表わす動作は, 単にその性質が均質的, 非限界的というだけではなく, 終了限界の契機づけが出

<sup>14</sup> РГ-80. С. 598; Падучева. Семантические исследования. С. 145; Dickey, “Aspectual Pairs,” pp. 1-37.

<sup>15</sup> Mehlig. Гомогенность. С. 594; Падучева. Семантические исследования. С. 145.

<sup>16</sup> Булыгина Т. В. Классы предикатов и аспектуальная характеристика высказывания // Аспектуальные и темпоральные значения в славянских языках. М., 1983. С. 37; Падучева. Семантические исследования. С. 145-146; Flier, “The Scope of Prefixal Delimitation,” pp. 55-56; Шатуновский. Проблемы русского вида. С. 67-75.

<sup>17</sup> Шатуновский. Проблемы русского вида. С. 68.

<sup>18</sup> Булыгина. Классы предикатов. С. 37.

<sup>19</sup> Падучева. Семантические исследования. С. 146.

<sup>20</sup> Там же.

来る有情物主体による活動（意図的な過程）であることがひとつの典型的なタイプとして提示されるということ。第二の点は、無情物主体による過程であっても限定継続態は形成されるが、それ単独では終了限界の契機づけが極めて弱いという事実。これらのことから、限定継続態にとって本質的な2つの位相の中でも、持続する安定的位相（過程・状態）の方が、動作の終了よりも、意味的な自立性が高く、さらにその安定的位相はそれを維持し中断（動作を終了）できる力を持つ動作主による意図的な活動として捉えられる場合に2つの位相が同一源に帰し、意味内容的な充足度が最も高くなる。もうひとつの位相、動作の終了限界は、限定継続態の成立に必須であるものの、有情物による意図的活動でない場合は、安定的位相の終了契機を動作主以外の外部に求めなければならず、不確定的で不安定なものとなる。もっともそうであっても限定継続態が形成されるという事実、現実的に考えて終了の契機づけをもたらす要因は様々にあること（例えば、別の出来事の生起など）を考慮すると、主体の性質に関わらず限定継続態の一般性は結局のところ動作を区切る終了限界を持ち込むことにあり、それは限定継続態が完了体動詞として、多少意味的に無理をしても、文法的限界を持ち込むというロシア語に特徴的な指向性の現れとも考えられる。

### 2-3. 限定継続態と量質転化

前節では限定継続態にとって意味内容的には持続する安定的位相の側面がより重要であると述べた。それに関連して限定継続態が表わす過程や状態の時間幅は相対的に短いもので（‘незначительный отрезок времени’）、性質的には軽微なもの（‘слегка’）と解釈されることが多い。<sup>21</sup>例えば、ペシコフスキーは「*побегал* や *покричал* は全速

<sup>21</sup> *Пешковский А. М. Русский синтаксис в научном освещении. М., 1938/1956. С. 111; Виноградов. Русский язык. С. 532; Земская. Типы одновидовых приставочных глаголов. С. 27; РГ-80. С. 598; James Forsyth, 1970. A Grammar of Aspect. (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), p. 21; Зализняк, Шмелев. Введение в русскую аспектологию. С. 111.*

もっとも、歴史を遡れば、指小弱化の意味だけが限定継続態にあって特別優勢であったとは必ずしも言えない。18世紀の規範を反映するロシア帝国アカデミー文法では *no*-派生動詞は指大意味と指小意味を持つとして、*походил* や *пописал* は「много, довольно или несколько, немного ходил, писал」と定義している。Российская грамматика, сочиненная Императорскою Российскою академиею. СПб., 1802. С. 151. ゼムスカヤは現代ロシア語の限定継続態において指大意味よりも指小意味が優勢となった背景について、諸意味の分化と、意味とそれを表わす形態の一体化が進み、限定継続態は指小限定意味に特化する一方で、指大意味（動作の強度や継続性）は別の動詞接頭辞がより鮮明に表現するようになったと述べている。*Земская. Типы одновидовых приставочных глаголов. С. 27.* 尚、現代ロシア語の限定継続態では指大意味が稀であるとはいえ *много, долго* と共起しないわけではない。ナショナルコーパスにおいても共起する例は見出される。例) *Ему чрезвычайно хотелось подробно и долго поговорить об этом страшном случае,*

力の走りや耳をつんざくような叫びには何だかそぐわない」<sup>22</sup> とし、過程の継続時間の短さが——ペシコフスキーの言葉では「二次的な連想関係」によって——動作の現れの程度の弱さに派生的に結びつくことがあると述べた。言語において、時間も含めた測定可能なものの量的評価が認知プロセスを経て対象の質的評価へと転化することは、タイラーによる指小形を例にした議論で知られる通りである。指小形は物理的で空間上に位置づけ可能なモノの単なるサイズの小ささを示すだけではなく、そこからメタファー転移によって持続時間の短さ、強度の軽微さに意味が拡張し、さらにそれは人間の経験的フレームの裏付けを得て表愛の態度や価値の軽視を表現するようになる。<sup>23</sup> 限定継続態の量質転化についても同様に解釈できる。

だが、動的事象の時間幅の短さはあくまでも暗示的、二次的な意味であって、それは限定継続態の本質である時間幅の不定性（‘некоторое время’, ‘for a while’）に由来する。<sup>24</sup> シャトゥノフスキーは「全体のある部分が不定なものとして提示されるには、この部分が全体の構成の中の異なる区分を占める可能性がなければならない。一方、その区分のいろいろにあり得る諸位置の異なりを語用論的観点から十分に——その区分が全体に一致しないように——保障するには、この部分は全体よりもはるかに小さくなければならない」。<sup>25</sup> したがって標準的な睡眠時間（8時間）を全体とすると、*Он поспал.*によって表される睡眠時間は標準よりもずっと短く、夕方を全体とする時間帯に *Он посмотрел телевизор.*が事実であれば、テレビを見たのは夕方の比較的短時間の話しであり、全体的な基準に近づけば近づくほど限定継続態は使用しづらくなる。<sup>26</sup> シャトゥノフスキーが指摘するように、人間の行う活動には、非限界的動作であっても、何らかの標準的で経験的な枠組みが定まっていることが多く、この全一的な枠組みが想定できるという意味では、その本来の性質として内的自明に定まる限界によって境界づけられている限界的動作と近似して見える。規範的体ペアとして存在する限界動詞と並行して限定継続態が存在するとき（例えば *писать-написать* と *пописать*）、ディッキーは限界動詞の体ペアが想定する動作完遂までに要する時間よりも、限定継続

---

*разрезавшем пополам всю его жизнь, <...>* (Куприн «Конокрады»). Национальный корпус русского языка. [<http://www.ruscorpora.ru/new/>] (2019年6月19日閲覧).

<sup>22</sup> *Пешковский*. Русский синтаксис. С. 111.

<sup>23</sup> John R. Taylor, *Linguistic categorization* (Oxford: Clarendon press, 1989), pp. 145-146.

<sup>24</sup> *Виноградов*. Русский язык. С. 532; Flier, “The Scope of Prefixal Delimitation,” p. 50; Dickey, “Aspectual Pairs,” p. 3; *Шатуновский*. Проблемы русского вида. С. 67; Janda et al., *Why Russian Aspectual Prefixes*, p. 93.

<sup>25</sup> *Шатуновский*. Проблемы русского вида. С. 67.

<sup>26</sup> Там же. С. 67-68.

態が含意する動作の持続時間の方が短いと理解されるのは自然であり、さらに非限界動詞の場合は本質的にそもそも持続時間が不定であるところに、限定継続態で完了体化し、ひとつの出来事として前景化するのだから、取り上げられた（プロファイルされた）動作が持続する時間幅は背景となる時間に対して相対的に短いものと認識されると説明した。<sup>27</sup>

### 3. 限定継続態が特別なわけ

ここまでの議論で、非限界動詞を派生基語とする限定継続態がどのように外から終了限界を持ち込むか、限界動詞が派生基語となる限定継続態は、完了体相関項とどのように差異化されるか、という点を見てきた。ここで限定継続態がロシア語の動詞アスペクト研究にとって特別な理由を改めて列挙しておく。

第一に、限定継続態はアスペクトの文法形態の形成基盤となるアスペクチュアルな動詞分類に相応しい場所がない。完了体である限定継続態は終了を迎えたひとまとまりの動作であり、したがって非限界的な状態動詞でも、活動動詞でもない。限定継続態から派生した第二次不完了体動詞（例えば *покуривать, полеживать*）は反復を意味するだけで、アクチュアルな進行を表わすことができず、したがって達成動詞でもない。また、安定的位相の持続時間の存在は瞬間的な変化を意味する到達動詞にも分類できない。したがって、ヴェンドラー分類のいずれにもあてはまらない。<sup>28</sup>

第二に、限定継続態は明らかに完了体であるにも関わらず、その意味が完了体の文法意味と矛盾し、逆に不完了体のそれに近く見える。完了体の共通意味を「非継続性 *непротяженность*」としてそのイメージをゼロ次元の「点」に例えたペシコフスキーは、それと限定継続態における接頭辞が表わす個別の体の意味「ある一定の（長くは無い）時間の断片」とが矛盾すると指摘した上で、完了体そのものの非継続性（点状性）は接頭辞が表わす継続性とは無関係だと強調した。<sup>29</sup> また、限定継続態は、不完了体動詞のように持続性を表わす状況語と自然に共起する（*почитал книгу два часа, ср. \*прочитал книгу два часа*）。これを受けて、ザリズニャク&シメリョフは「限定継続態は、完了体に属しながらも、（過程を意味する）派生基語の不完了体動詞の性質をいくらか保持している」<sup>30</sup> と述べる。

<sup>27</sup> Dickey, "Aspectual Pairs," p. 3.

<sup>28</sup> Flier, "The Scope of Prefixal Delimitation," pp. 41-43.

<sup>29</sup> *Пешковский. Русский синтаксис. С. 111.*

<sup>30</sup> *Зализняк, Шмелев. Введение в русскую аспектологию. С. 111.*



第三に、限定継続態は、動作様態の一つであるにも関わらず、はっきりとした語形成意味を派生基動詞にもたらしっていると意識されないことが多い。派生基動詞が表わす動作に接辞が表わす語形成意味で変形を加える動作様態は、始発の動作様態 (*побежать, закричать*), 終止の動作様態 (*отпеть*), 一回態 (*махнуть*) のように付加される変形意味が明確であり、容易に派生基動詞と区別される。だが、限定継続態は派生基動詞が意味する動作がある時間幅で存在したことしか表わさない。先述の通り、限定継続態が表す非限界的動作は、一端生起すれば外からの契機でそれを終了させない限り、理論的には存在し続ける事象であるが、無論、現実世界で際限なく続く事象というのはかなり限定され (2-1.), 通常は開始したら、何らかの理由で、終了すると考えるのも経験的には比較的“自然な成り行き”であり、そのような事象 (例えば、人間の活動) や現象 (例えば、自然現象) も数えきれない (2-2.)。ここから限定継続態の生産性が高いことも、限定継続態の意味が話者の経験則に則っても特別な変形意味が加わっていると意識されにくいことも説明される。そうして、動作が時間的に境界づけられているという文法アスペクト的性格と、派生基動詞と派生動詞の間に語彙意味的な差異が「ない (ように見える)」という二つのアナロジーにより、限界動詞の完了体相関項と非限界動詞から派生した限定継続態が隣接することになる。

第四に、限定継続態と完了体相関項を形成する *no-*派生動詞の境界は曖昧である。現代ロシア語の規範文法では、文法的パラダイムとしての完了体: 不完了体の対立と、語彙文法カテゴリーとしての動作様態は明確に区別されていることは述べた通りである。だが、*смотреть-посмотреть фильм* のような典型的な体ペアを形成する *no-*派生動詞が表す動作の結果の意味と *посмотреть телевизор* のような限定継続態の意味は、語彙意味が非常に近く、両者の線引きは難しい。<sup>31</sup> ヤンダは規範的体ペアを形成する *no-*派生動詞には文法的アスペクトの結果意味と限定継続態の不定時間幅の意味が二重に重なり合っていると考えた。<sup>32</sup>

このように、非限界動詞と限定継続態の関係性と、限界動詞から成立する規範的体ペアの関係には類似する点が多く、非限界動詞の限定継続態に関しては、その完了体化における高い規則性、生産性、標準性を背景に、それを「体ペア」として認める可能性を支持する研究者は少なくない。<sup>33</sup> そうすると、ペアとなる完了体が欠如す

<sup>31</sup> Авилова Н. С. Вид глагола. С. 204-206; Шатуновский. Проблемы русского вида. С. 69.

<sup>32</sup> Janda et al., *Why Russian Aspectual Prefixes*, pp. 93-97.

<sup>33</sup> Петрухина Е. В. Аспектуальные категории глагола в русском языке в сопоставлении с чешским, словацким, польским и болгарским языками. М., 2000. С. 187; Зализняк, Шмелев. Введение в русскую аспектологию. С. 112; Шатуновский. Проблемы русского вида. С. 69.

る非限界動詞に完了体項（＝限定継続態）があてがわれることになり、現代ロシア語において、体ペアのパラダイムは限界動詞だけではなく非限界動詞も取り込んだ形で体系化が進むことになる。

動作を終了限界で区切り、境界づけるという点では規範的体ペアをなす完了体相関項と限定継続態は共通するが、異なるのは区切りの性格である。メーリッグは、限定継続態は動作の時間的区切りしか表さないのに対し、完了体相関項はその区切りが「新しい状態への移行」を意味する点で異なると指摘した。<sup>34</sup> 一方、ディッキーは限界動詞の完了体相関項で表されるのは、その動作の自然な結果 *natural result* であり直接的な帰結 *direct consequence* であるが、限定継続態では当該の動作そのものを通して関連する間接的な帰結 *tangential consequence* がもたらされるのであるから、後者もやはり「結果的」とであると論じた。<sup>35</sup> 2-2.で論じたように、典型的な限定継続態が人間の意図的な活動であることは、何らかの目的をもって開始された活動はその本人によって何らかの理由で終了させられたのであり、その決定の背後には何らかの結果に到達したことが推定されると考えることができる。ペトルーヒナは目的志向性のある活動の限定継続態は部分的な結果到達を表わすが故に完了体相関項と近接し、その際に意味的に前面に押し出されるのは動作の持続性ではなく動作の終了であり、それは良いや悪いといった結果的な評価を持ち得ると述べる。<sup>36</sup>

#### 4. *Мы порешаем этот вопрос.*

本来、規範的な完了体相関項を持たない非限界動詞とそれに語形成意味として終了限界を持ち込んで作られる限定継続態とが機能的に体ペアのように振る舞うという現象と、規範的な完了体相関項を持つ限界動詞が、それと並行して限定継続態を持つという現象は、性格が異なる。前者における限定継続態は、体系の中に欠如しているものの代替機能を果たす役割を担うことで体系を構成する他の規範的な完了体相関項と機能的に同化していくが、後者では、既に体系の中に自然な形で収まっている規範的な完了体相関項と並んで、時に競合する形で限定継続態が登場するわけであるから、両者の異質性は際立つ。本節で取り上げるのは後者の例である。

自然な形で内的限界が見込まれている動作に対して、それを取り払い非限界的な解

<sup>34</sup> Mehlig. Гомогенность. С. 595.

<sup>35</sup> Dickey, "Aspectual Pairs," pp. 17-18.

<sup>36</sup> Петрухина. Аспектуальные категории глагола. С. 187. また、ペトルーヒナはロシア語の限定継続態はこのように動作の終了の意味を明確に表わす点で、西スラヴ諸語（チェコ語、スロバキア語、ポーランド語）の限定継続態と異なると指摘している（同頁）。

積を要求し、すなわち、結果ではなく持続する活動的な側面に焦点を向けさせるという限定継続態の用法を効果的に利用している例として興味深いのが、役人言葉として昨今取り上げられている *порешать* である。その派生基語である *решать* は完了体 *решить* より接尾辞派生した不完了体動詞であり、両者で規範的な体ペア *решать-решить* を形成する。以下は、メディアに登場する *порешать* の例である。<sup>37</sup>

- (2) *Они там (в правительстве. – Е.Р.) любят порешать какой-нибудь вопрос, а потом благополучно о нем забыть (радио).*
- (3) *Ничего не изменилось: они (чиновники. – Е.Р.) по-прежнему уклоняются от прямой ответственности, не решают вопрос, а лишь стараются его «порешать» (Независимая газета, 2001, 21 ноября).*

官僚たちによって使われる *Мы порешаем эту проблему.* をシャトゥノフスキーは次のように解釈した。

*Мы порешаем эту проблему.* ≈ “Мы начнем решать (обсуждать, искать решение этой проблемы), будем это делать какое-то время и, может быть, найдем решение, а может быть не найдем, и в любом случае прекратим обсуждение”<sup>38</sup>

シャトゥノフスキーは、2-3.の *поспать* の例と同様に、この場合も、問題の解決にあたってある一定の時間の持続性を持つ標準的な時間枠が設けられており、それが限定継続態における動作の限界、つまりその終了限界として機能すると述べる。<sup>39</sup> そこには動作が望まれる結果に到達するかどうかの情報は含まれず、動作主である人間がどのように問題解決のプロセスにあたるか、に関心が向けられる。例文に沿って換言すれば、「私たちは問題に対して前向きに検討する」が、必要十分に検討した後に望まれる結果が出るかどうかは不明である、ということだ。<sup>40</sup>

<sup>37</sup> Ремчукова Е. Н. Креативный потенциал русской грамматики. М., 2011. С. 122. (2), (3) の例文は当文献からの借用であり、例文中の強調は原文のものである。

<sup>38</sup> Шатуновский. Проблемы русского вида. С. 72. 例文中の強調は本稿筆者のものである。

<sup>39</sup> Там же. С. 72-73.

<sup>40</sup> 「前向きに検討する」をはじめ、日本語には「問題の解決」に向かう過程を表現するこの種の語彙が少なくなく、やはり「確実な結果を志向しない態度」という含意を持つ点でロシア語と同様に役人言葉とされている。他にも、「適切に処置すること」を意味する「善処する」や、「対

結果到達を明示する規範的な完了体相関項 *решишь* を横目で睨みながらの限定継続態 *порешать* の使用であるから、その解釈も明確な結果到達を打ち消す方向性に強く働く。限界動詞による規範的な体ペアは、動作の内的限界に向かう過程を表す不完了体項とその限界到達を表す完了体項からなるが、その中には *писать-написать* (*письмо*), *открывать-открыть* (*окно*) のように、主体が努力すればそれだけで自然な結果として内的限界に到達すると考えられる行為もあれば、*решать-решишь*, *доказывать-доказать* のように、主体の努力に加えて「幸運」の要素が必要とされるタイプのペアもある。後者のタイプをザリズニャク&シュメリョフは不完了体項の「試み」: 完了体項の「成功」として対立させた。<sup>41</sup> ここに動作を遂行する人間の側からは、問題解決が成功するという結果を約束せずとも、解決を試みようとして行動するだけで *решать* の表す動作が成立すると解釈させる余地が生まれる。そこからさらに、問題を解決しようというつもりがなくても、そのように努力している姿さえ見せればそれでよい、という解釈まではあと一步である。*решишь* を限定継続態 *порешать* へ意図的にすり替えることによって、話者の問題に関わりたくないという気持ち、結果に対して責任を負いたくないという真意が顕在化し、「限定継続態で表された動作はまさに結果の《不明瞭さ》が念頭に置かれ、聞き手によって否定的に評価されることになる」。<sup>42</sup> *решишь* であるべきところに *порешать* を使用する現象は、ロシア語話者にとっても“耳障りに”聞えるようで、ロシア語の検索エンジンには、なぜそのような現象が起こるのかという質問と共に、*порешать* の「未完結」であることの「無責任さ」や「表面的」という否定的ニュアンスが論じられ、「言葉の乱れ」や「正しくない」という評価も飛び交う。<sup>43</sup>

*порешать* は役人言葉以外にも別の分野で登場する。カルポフは現代ロシア語の俗

---

応を協議する」「可及的速やかに対処する」「全力を挙げて対応する」「最大限努力する」など。これらとロシア語の *порешать* の差異のひとつは、ロシア語の表現には「解決する」語彙素が含まれているが、日本語の動詞表現の語彙意味には結果（限界）到達を見込みとしてでも含むような意味要素は無いということだ。日本語の表現に関しては以下の文献などを参照。東大ベストセラー出版会 PICASO 編『東大生が書いたお役人コトバの謎』三省堂、2006年。

<sup>41</sup> Зализняк, Шмелев. Введение в русскую аспектологию. С. 56-57.

<sup>42</sup> Ремчукова. Креативный потенциал. С. 122.

<sup>43</sup> «Почему некоторые говорят "порешал" вместо "решил"?»

[<http://www.bolshoyvopros.ru/questions/2784367-pochemu-nekotorye-govorjat-poreshal-vmesto-reshil-s-m.html>] (2019年6月19日閲覧); «Семь раз обкашляй, один подскочи». Глупые штампы "делового" быдла»

[<https://www.anews.com/p/104853659-sem-raz-obkashlyaj-odin-podskochi-glupye-shtampy-delovogo-bydla/>] (2019年6月19日閲覧).

語で、*решать-решить* の語彙素とその派生語 (*порешать, решение*) が、違法性のある行動とそれに対する違法性のある支払い (賄賂) を暗に意味するようになったことを指摘している。<sup>44</sup>

(4) СМ: *Ну ему там, в ГАИ надо сдавать, правильно?*<sup>45</sup>

К: *В ГАИ надо сдавать, 19-го будет сдавать. Сможешь подъехать там порешать вопрос?*

СМ: *Ну попробуем, не обещаю, сам знаешь как.*

К: *Не надо попробовать, надо помочь. ...*

К: *Ну, ты все равно подъедь 19-го, порешай вопрос, если реально решишь вопрос, человек сдаст, люди, которые заинтересованы в его сдаче, как и он, отблагодарят. ...*

К: *Если вдруг, если он завалит 19-го числа, документы забирай в свою школу его тогда, оформляй его в свою школу и решай вопрос в ближайшие дни, там неделю.*

カルポフによれば、**К** の *не надо попробовать, надо помочь* という発話は ‘何が何でも問題を解決すること’ を意味し、この意味はその後の **К** の発話 *реально решишь вопрос* が断固とした調子を伝える特別なイントネーションで発話される点に受け継がれる。<sup>46</sup> その一方で、*порешать/порешай вопрос* に断固とした調子は無く、話者は動作の完結も結果も前提とせず、見込み止まりの意味と過程の持続性を強調すると説明している。賄賂による決着の意味に関しては、完了体相関項と限定継続態の意味的対立というよりは、*решать-решить* ならびにアスペクトの意味的差異の無い動作名詞 *решение* も含んだ語彙意味における拡張が起こっていると考えてよいだろう。だが、通常の、正当な決着の仕方ではなく、別の決着の仕方を取るよう行動を促す (ディッキーの間接的帰結を参照) という文脈は、限定継続態 *порешать* を使用する契機として考えられるかもしれない。<sup>47</sup>

<sup>44</sup> Карпов Д. Л. «Всё нормально решим»: слова с потенциальным коррупционным значением // Социальные и гуманитарные знания. Т. 2. № 1. 2016. С. 48-52.

<sup>45</sup> Там же. С. 49. 尚、例文中の強調は本稿筆者のものである。

<sup>46</sup> Там же. С. 51.

<sup>47</sup> 興味深いことに、ロシア語母語話者のインフォーマント (大学教員) 3 人に当該会話文の該当箇所について *решить* と *порешать* のどちらを用いるか尋ねたところ、全ての箇所に *решить* が望ましいとの回答を得た。同時に、そもそも *порешать* の使用そのものが社会階層や教育水準など話者の属性に大きく依存するというコメントがあった。その上で、...*порешай вопрос, если*

## 5. まとめにかえて

ロシア語の語形成手段である限定継続態 *порешать* と日本語の複合動詞「勝ち切る」を比べてみる。

両者とも合成基語となる単純動詞が表す動作に終了限界を意図的に持ち込むという意味では共通するパラレルな現象と言える。だが、限界を持ち込む話者の意図とそれによる効果のベクトルは逆向きである。日本語の場合は、動作の絶対的で最終的な限界到達を強調する方向に向けられたものだったが、ロシア語の場合は、動作から絶対的な内的限界を取り払い、通常意図される行為が本質的に成立する前に「時間が来たから終わり」のように過程を打ち切り終了させる性格を持つ。ロシア語の場合、そこから、逆に、動作主がどのように活動に取り組むか、という持続的な態度に意味的な焦点が置かれる。

もう一つの共通点は、日本語の「勝ち切る」にしても、ロシア語の *порешать* にしても、規範的な表現からある種逸脱したもので、口語的ニュアンスを伴い使われる文脈や場面が限定されている点である。各言語に深く根をおろす優勢的な世界の見方は、当該言語の言語体系の中に、その様々な言語レベルの中に広範に影響を及ぼす。その中で時に話者が不自由を感じて規範的でニュートラルな表現を逸脱することで生み出される表現もまた、優勢的な世界の見方の例証となるであろう。

### Прагматическое употребление делимитативов в русском языке на примере *Мы решаем этот вопрос.*

KANÉKO Юрико

В описании аспектуальной категории в русском и японском языках отражаются различные лингвоспецифичные картины динамического мира: для русского языка важна идея предела действия, а в японском языке в противоположность русскому больше внимания уделяется стабильным (непредельным) фазам действия. В данной статье

---

*реально решишь...* の箇所に関しては、前者による過程の持続性と後者の結果としてのコントラストが強調されるので、*порешай* の許容度が上がるという指摘もあった。

рассматривается обратная сторона этой семантической доминанты в русском языке: речь пойдет о структурно-прагматическом аспекте делимитативов, которые по правилам образуются от неопределенных глаголов (*походить, поработать*). По нашему мнению, комплетив в японском языке и делимитатив в русском могут играть аналогичную прагматическую функцию, компенсируя с помощью словообразовательных средств менее разработанную семантическую сферу в аспектуальной системе каждого из сравниваемых языков. Одним из примеров расширения сферы употребления японского комплетива является разговорный дериват *кати-киру* [победить-комплетив] ‘в конце концов победить’, образованный от глагола *кацу* ‘победить’ и часто встречающийся в спортивных репортажах.

В русском языке реализацию словообразовательного потенциала можно наблюдать в делимитативах, т.е. в обратном от японского языка направлении в сторону сброса сильной семантической нагрузки предела действия. Когда делимитативы образуются от предельных глаголов, повышается коммуникативное намерение говорящего устранить свойственную исходному глаголу идею предела действия. Возьмем фразу *Мы порешаем этот вопрос*. И. Б. Шатуновский трактует ее следующим образом: ‘мы начнем решать, будем это делать какое-то время и, может быть, найдем решение, а может быть не найдем, и в любом случае прекратим обсуждение’. Действие, выраженное глаголом *порешать*, именно из-за «неясности» результата понимается как отражение формального, бюрократического отношения чиновников к своим делам и оценивается слушающим отрицательно. Итак, используя делимитатив *порешать*, а не нормативный соотносительный глагол СВ *решить*, говорящий смещает акценты и вместо того, чтобы подчеркнуть направленность действия на результат, выводит на первый план именно процесс поведения действующего лица и, таким образом, трансформирует предельное действие в неопределенную деятельность.